Field of invaluable learning

FIL

Field of invaluable learning 2016

Produced by LV College!

Learning Value

Contents

発表団体インタビュー 4

1. 関西大学 恋する学問
2. 東京国際大学 ボランティアサークルWITH
3. 東京農業大学厚木キャンパス だいこん１万本プロジェクト
4. 常磐大学 TSS支援チーム
5. 東京都市大学 ラーニングコモンズ
6. 北九州市立大学 地域共生教育センター（421Lab.）
7. 東京国際大学 川越フロンティア
8. 梅光学院大学 Buchiサポーター

教職員インタビュー 20

1. 関西大学（恋する学問） 三浦真琴氏
2. 東京国際大学（ボランティアサークルWITH ）岩崎暁男氏
3. 常磐大学（TSS支援チーム） 関 敦央氏
4. 名古屋学院大学学生支援課 小竹佑典氏
5. 茨城キリスト教大学キャリア支援センター　鹿志村やよい氏

当日アンケート報告 25

発表団体紹介 28

開催を終えて 30

株式会社ラーニングバリュー代表取締役　安田仁秀

支えてくれる人がいるから、「今」がある。

Fil2016 応援したい団体第1位

関西大学
恋する学問

**恋するように、学んでほしい。
そう考えて作ってきた授業「恋する学問」
Filを通じて、広がった恋心や、新しいチャレンジについて語ってくれました！**

左から篠原さん、松田さん、緒方さん

3人で過去のことから未来のことまで語り合うことができた

――なぜFilに参加を？

松田　これまでの活動を伝える言葉を探したいという思いから応募しました。「どんな授業をしているの？」と聞かれた際に、どのような言葉を選べば、相手に伝わるのだろうとずっと考えていました。
しかし、授業をしている間は、受講生と向き合うことに精一杯で、なかなか学外に発信する余裕がありませんでした。そのため、今回の募集を見たとき、春休みにやりたいことはこれだ！と思いました。

――発表準備の中で気づいたことは？

松田　授業が始まってからは、授業内容のことや受講生の話を優先的にしていたので、いつの間にか3人の想いを確認し合う時間が減っていました。
今回の準備をしていく中で、2年前から未来のことまでを3人で語り合うことができ、改めてこの3人、三浦先生、関西大学…いろいろな条件が揃ってカタチになった授業だと思いました。恋する学問を創っている間に自分達の恋心も大きくなっていることに気がつきました。

学生だからできることがある

――Filで一番伝えたかったことは？

松田　「学生だからできること、気がつけることがある」ということです。学生にはもちろん、周りの大人にもそのことを分かってほしいと思います。社会をあまり知らないからこそ出てくるアイデアを堂々と主張できるのも学生の特権です。また、なんのしがらみもない学生だからこそ、信頼関係を築ける人もいます。その機会を存分に使える「今」だからできることがたくさんあると思います。

――それは伝わったと感じる？

松田　私たちの発表後にたくさんの方が質問してくださったり、声をかけてくださいました。その中でも印象に残っているのが、社会人の方の「3人もすごいけど、それを支えてくれる先生・学校もすごいね」という言葉です。発表のなかで、感謝の言葉を直接伝えたわけではありませんが、支えてくださる人がいるから「今」があることを伝えられていて安心しました。

新たな一歩を踏み出す原動力に

――メッセージカードにはどのようなことが書かれていましたか？

篠原　「恋する学問に恋しました。詳しい授業内容が知りたい！今度、授業を見に行ってみたい」など、恋する学問に興味を持ってくださり、私たちの今後を楽しみにしてくださっているようなメッセージを沢山いただきました。
素敵な応援メッセージを頂いたことで、こんなにも沢山の方々が私たちに期待してくれているんだということが実感でき嬉しかったです！と同時に、「もっと進化しつづけたい」という想いが強まり、新たな一歩を踏み出す原動力となっています。

――Filに参加して１番良かったことは？

篠原　「発信する大切さ」を再確認できたこと！
言葉にすることで、
多くの人の心を動したり、誰かの何かのキッカケになることができる。

言葉にすることで、
熱い想いをもった新たな仲間とつながることができる。

言葉にすることで、
メンバー間で、お互いの意思や想いの再確認ができ、自分たちの新たなステージでの目標を発見することができる。

活動内容が違っても、悩みや課題は同じだった

――Filでの話し合いで気づいたことは？

松田　グループの中に学生だけでなく、社会人の方もいらっしゃったので、色々な視点から話し合いをすることができました。特に大学の先生とお話をしている時、学生への親心を感じました。私たちも授業を進めていくうちに授業・受講生を「愛おしい」と思ったので、その気持ちと似ているのかな…と思ったりもしました。来年は「恋心」ではなく「親心」をテーマに発表しているかもしれません（笑）

――他の発表を聞いて感じたことは？

篠原　たとえ取り組んでいる活動内容が異なっていても、組織運営をする上で、似たような悩みや課題を抱えているのだなと思った。
なので、発表後に、その悩みや課題を解決するためにどのような取り組みをしたか共有しあったり、より良い解決案をともに考え合ったりした。どの団体も強い意志をもって取り組んでいるので、意見交換し合うのが面白かったです！

――「すごい！」と思った団体は？

緒方　すごい！と感じたチームは、梅光学院大学 Buchiサポーターのみなさんです。大きな期待と不安を胸に正門をくぐる新一年生にとって、これほどの強い味方はいないでしょう。一年生の気持ちを、上回生になっても忘れずにいれる優しい方々の集まりがBuchiだと思います！ぶちかっこいいです！

関大を飛び出したい！

――新たに始めているチャレンジは？

篠原　チャレンジしたいことが止まりません！
すでに実施していることは、より多くの方に情報を発信していきたいと思い、恋する学問公式ブログをはじめました。
（http://koisurugakumonn.hatenablog.com）
これからチャレンジしたいこととしては、恋する学問2016では、受講生がプレゼンテーションをして終わるのではなく、アイデアを実行してみるなど一歩すすんだ段階まで挑戦できる機会を授業内でつくること。
Fil2016のような場を関西大学につくり、熱い想いや意志をもった関大生が活発に挑戦できる機会をつくること。
「出張！恋する学問」と題して、私たちの活動に関心を持ってくださった大学や小中高等学校、その他にも地域のコミュニティなどを訪れ、恋する学問の授業を関西大学を飛び出して実施することを考えています！

――活動支援金等の使い道は？

緒方　次年度の「新！恋する学問」で受講生とより良い授業を彩っていくために、教室の装飾や授業風景の写真の現像、行事の経費、新たなチャレンジの活動費に使おうと考えております！これからもどんどんチャレンジできる環境を頂けたことに本当に感謝しています。また、普段からお世話になっている先生や職員さんにお礼の気持ちをこめてお土産を買って帰りました！

学生の可能性を信じてくれたおかげで誇りが持てた

――最後に、これから学生の活動支援をしたい、しようと思っているオトナたちにアドバイスを！

緒方　この度は、学生の輝ける舞台を創ってくださり、ありがとうございました。
学生という立場は、肩身が狭いと感じることも多々ありましたが、今回の舞台では学生の可能性を信じてくださるオトナの方々に見守られることで、学生という立場に誇りをもてるようになりました。ありがとうございました。

私たちにできることは、まだまだたくさんある。

Fil2016 応援したい団体第2位

東京国際大学
ボランティアサークルWITH

東日本大震災から5年。
気仙沼を中心に、震災直後から支援をしてきたWITHのメンバー。

人との出会いから続いてきた絆を、Filでも感じてくれたようです。

実際に行動に移さなくては意味がない、と感じた

――なぜFilに参加を？

小林　理由は2つあります。1つ目は、新しい取り組みの1つとして参加を希望しました。私たちの課題として、〝新しい挑戦〟があげられており、その第一歩となる良い機会だと思いました。2つ目は、認知です。私たちWITHの存在そして、活動内容はもちろん、東日本大震災という出来事を決して忘れて欲しくは無いという思いが込められています。

――発表準備や発表をしたことで気づいたことは？

小林　私たちにできることは、まだまだたくさんあることに気付き、後日メンバー全員から具体的な活動案がだされました。理由は、私たちと同じように課題を抱えている学生さんがたくさんおり、その中でもがきながらも解決方法を見出し行動に移し、今後のために頑張っている姿を発表から感じたことがきっかけです。口だけでなく実際に行動に動かなければ意味がない、小さなことでも今の私たちにできることを探そう、といった姿勢に変わりました。

――Filで一番伝えたかったことは？

小林　東日本大震災から5年経った今も、被災者の方々は昨日のことのようにあの日のことを覚えている、ということです。ボランティア不要論を耳にしたことがある方もいらっしゃると思います。しかし、求める形は変わっていても助けや協力を必要としているのだという現実を一人でも多くの方に知ってもらいたいと思っています。。

――それは伝わった？

小林　伝わったと思います。私たちの発表中の聞いてくださっている皆さんの真剣なまなざし、そして発表後たくさんの方が質問をしてくださったことが、私たちの活動又は震災のことに興味を抱いてくれてこその行動だと感じたからです。その後席についてからや休憩中などにも、活動について個人的に尋ねてくれたり、その際に「WITHさん」と、名前を覚えてくださったことからも感じました。

方向を見失いそうなときは、メッセージカードを読み直したい

――メッセージカードにはどのようなことが書かれていましたか？

笹原　参加者の方々からもらったメッセージで特に多かった意見は、気仙沼の復興による変化と共に、WITHが行う活動を変化させつつ、新たな体制となっても新しい活動に挑戦していく私たちの姿に好感を抱いたという意見がとても多かったです。また、この発表を通して改めて震災の事や被災地の事を考え直すきっかけになったという意見もいただくことができました。
これらの意見をもらったことにより、私たち自身がこれからの活動していく上での励みになりました。気仙沼に寄り添い続けたいと思いながらも、自分たちが向かう方向を見失いそうな時には、全員でメッセージカードを読み直したいと思います。

聞かれたことで改めて存在意義を確認できた

――Filに参加して1番良かったことは？

鈴木　活動内容は違っても、学生として何かに向かって仲間と頑張る、そんな素敵な人たちに出会えたことです！同じ悩みを抱えた学生さんたちがいることで、新しい考え方を共有できたことがとてもよかったと思いました。また、様々の方がFilの発表を見に来てくださり、そこからも新しい繋がりを作ることができました。私たちの活動の軸でもある、’繋がりを広げていく’という点で、この機会が私たちの第一歩となったと、メンバー全員が感じています。

――Filでの話し合いで気づいたことは？

笹原　見ず知らずの年齢も価値観も違う人たちとグループで話し合いをしたので、その方々からの経験を通じたコメントを発表の後、グループ内でいただくことが出来て良かったです。
「気仙沼へ実際に行って何を学んできた？」と大人の方に質問され、私は「〝気仙沼では震災があって街が変わってしまったけど、私たち(気仙沼の人々)が得た`震災があっても生きるための教訓`を伝えたい〟という気仙沼の方の気持ちを受け取りました。だからこそ、学んだことを人々に広めなければって思いま

す。」と答えました。自分たちの活動の意義を問いただす質問だったので、これからの活動への意識が一層強くなりました。

自分の視野が広がった

――他の発表を聞いて感じたことは？

鈴木　発表の仕方が様々で、団体らしさが現れていたので素敵でした！！また各地方から集まっており、彼らの地域・大学だからこそできるものもあり、ものすごく個性溢れていたなと感じました。同じ学生として、他の地域の学生はあんなことをしているんだと知ることができ、自分自身の視野がものすごく広がりました。来年も参加しようとそう思えました！！

――「すごい！」と思った団体は？

田口　東京農業大学さんのだいこん1万本アートプロジェクトが”すごい！”と感じました！初めての試みながらも、なにが課題なのかを明確にしそれを試行錯誤し乗り越えていく姿が発表を通して感じることができました。発表を通してなにかに挑戦していく大切さを改めて感じることができました！
また、自分たちの活動にとても自信を持っているなと感じることができました。失敗を恐れず、よりよい活動にしていくためにチームみんなが切磋琢磨して活動しているなと思いました！

日常への感謝から主体的になれた

――WITHでの活動によって、他の生活に影響があったことはありますか？

田口　WITHの活動を通してメンバー一人ひとりの価値観や意識が変わり、人間的に成長できることがあげられます。
学校へ行けること、家族がそばにいること、友達に会えること。この当たり前が当たり前ではないと気づかされ、日常へ感謝することを改めて気づかされました。
入った当初はなかなか意見が言えず、主体性がないメンバーがほとんどでした。しかし活動やメンバー間で刺激をし合い、自ら意見をだしたり役割を持つなど互いに成長し主体性を持ったメンバーがたくさんいます。成長したことによって、学業を改めたメンバーや留学を決めたり、他のボランティアに積極的に参加したり新たな挑戦をしたメンバーもいます。他にも主体性をもって新たな挑戦に向かっているメンバーがたくさんいます。

――新たに始めているチャレンジは？

高橋　今回のコンテストでは、私たちメンバー全員、他団体の発表を聞いたり、またその団体の方との交流を通じて、とても刺激を受けました。
そういった、交流の中で、私たちと同じように東北を支援する活動を行っている方との新しい出会いがあり、今後は、そういった、大学外の方との交流を深め、協力して活動を行えたら良いと思っています。

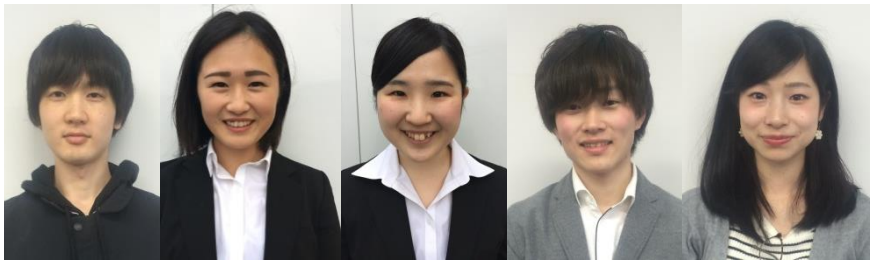
――活動支援金等の使い道は？

田口　WITHは毎年の夏、被災地である宮城県気仙沼市で復興支援を行っています。継続は力なりという言葉があるように私たちは今後も気仙沼市を中心に復興支援をしていきたいと思っています。今年の夏の活動資金にしたいと思っています。

困ったとき、少しだけアドバイスして欲しい

――最後に、これから学生の活動支援をしたい、しようと思っているオトナたちにアドバイスを！

高橋　私たちの活動には、賛否両論あるとは思います。私たちの大学でも、職員との対立もありました。大学生というのはまだまだちっぽけな子どもです。世界のほとんどが、わからないことばかりです。
だからこそ、私たちの力だけで学び、挑戦しようとしています。その努力や希望を壊そうとする権利はオトナの人にはありません。
しかし時には私たちだけではどうにも出来ない時があります。その時に少しだけアドバイスをもらえるだけで私たちはとても幸せです！



今回インタビューに答えてくれたのは、左から高橋くん・田口さん・小林さん・笹原くん・鈴木さん

やっぱり、いいチームだったんだなって。

Fil2016 応援したい団体第3位

東京農業大学厚木キャンパス だいこん１万本アートプロジェクト

今回インタビューに答えてくれたのは、左から高田くん・小林くん・座間くん・山内くん・原田くん

「就活に役立つよ！」と言われ、なんとなく参加しただけなのに、最後は4000人の笑顔の立役者に！！
ハメられた！と言いつつ、責任感と、育っていくダイコン、そして仲間と共に歩んだ自分たちを振り返ってくれました。

挑戦する大切さを伝えたかった

――なぜFilに参加を？

高田　プロジェクトはとにかく無我夢中だったんですよね。こういった場を通じて、仲間で振り返る良い機会になると感じました。

座間　プロジェクトの流れとして完結させたかったからです。また、就活のネタにもなるのかな、と感じました。

山内　賞金･･･

――発表準備の中で気づいたことは？

小林　フィードバックする大切さです。プロジェクトが終われば、成功の余韻から気持ちよくなりがちで、黒い部分を忘れてしまうので、そういった意味合いで当日までのことを再度、考えながら思い出していく中で、また冷静にプロジェクトのことを思い返すいい機会になったと思います。

高田　始めにプロジェクトについて感じたこととか伝えたいこととか、みんなで振り返ったんですが、場面場面でそれぞれ感じ方が違うこともあって。それは面白かったですね。話す事は沢山あったんですが、苦労話だけで終わらせたくなくて。伝えたいことをブレないように気をつかいました。それと、改めて、チームで取り組んだ訳ですが、みんなでワイワイやる準備はやっぱ楽しかったですね。いいチームだったんだなと思います。

原田　振り返ることで、イベント中には気づけなかった自分の変化に気付くことが出来た気がします

――Filで一番伝えたかったことは？

山内　何事にも挑戦するということは大切だということです。やりたくないこと、面倒な事だとしても、やってみると単純に楽しかったり、いわゆるいい経験になったりすると思います。

小林　挑戦する勇気です。今は時代の風潮から感じるように楽な方に流されがちな世の中で、泥臭く、地味にコツコツとなんて時代遅れの考え方は、陳腐なものとなってるのも現状ですが、僕たちみたいに泥まみれになりながら、無反応なダイコンをただ一心に見つめ、成功へとひた走る姿を感じて、何事にもまずはやってみようという気持ちを持ってくれる人が増えるといいなと思って。

座間　自分たちが変わることが出来たのは、行動をしたからこそだと思っています。その勇気をもつことの大切さもしって欲しかったです

――それは伝わったと感じる？

高田　難しいですね。でも挑戦するかしないかって場面でそっと背中を押すきっかけになれればと思います。

原田　懇談会の時に話した多くの団体の方が『わかりやすい発表だった』『挑戦する勇気の大切さがわかった』などの意見を頂いたので伝わったと思います。

Filではいろんな視点からの意見や見方を学ぶことができた

――メッセージカードにはどのようなことが書かれていましたか？

高田　伝えたいことがハッキリ伝わったという意見が多かったです。ここら辺は意識的に構成していたので、目論見通りでした。他人から評価してもらうのは、素直に嬉しいですね。

小林　プラスの心温まる意見ばかりだったので、本音を言うともっとギラギラした意見が欲しかった。

――Filに参加して１番良かったことは？

座間　他人の意見やアドバイスが一番為になったと思います。話し合いの時間が設けられたことで、いろんな視点からの意見または見方を学ぶことが出来ました。

小林　他団体の学生が自分たちのやりたいことを実行しながらキャンパスライフを送っている様子を発表を通してかいまみることができ、自分自身も院生に進学し、大学院生活を楽しんでいるか疑問に思い、このような機会で他団体の学生と接することでこのような忘れ

ていた気持ちを思い出すいいきっかけになりました。

――他の発表を聞いて感じたことは？

高田　色んな伝え方があるんだなって感じました。普段、理系ガッチガチのプレゼンばかり聞いていたので、新鮮でした。それでも、どの団体も、個人や団体で課題にぶつかって、等身大に悩んで、挑んでいくプロセスがありました。そこは同じなんだなと感じました。

――「すごい！」と思った団体は？

小林　恋する学問です。大学という場所での先生が学生に対して講義をするという固定観念をきれいに覆されたので。

座間　WITH。伝統的に続いてきたことを変えていかなければいけないことを、気付いている点がスゴイと感じました。

いいチームの中で、人は成長するのかもしれません

――だいこんプロジェクトに参加してから、その他の生活に影響はあった？

原田　プロジェクトを終えて、分野や研究室を越えたつながりが院生同士で出来ました。悩み事や手伝えることはお互い助け合いたいですね。

高田　いいチームって何なのかなって考える様になりました。いいチームの中で、人は成長するのかもしれません。今、院生として研究室の学部生を支える立場になりましたが、今回の経験を活かして研究室をいいチームにして皆で成長していきたいな、と考えています。

――新たに始めているチャレンジは？

座間　今年の経験を次の世代にしっかりと伝えることです。特に失敗した部分がとても重要だと思います。

高田　だいこんプロジェクトは、次の学部生に引き継がれました。今度は、後輩達がいいチーム、プロジェクトにしていけるようにバックアップしていきたいと思います。今回はたまたま成功に終わりましたが、良かったこと、悪かったことを次の子達に伝えていきたいです

小林　あくまでも外は外であり、当日発表を聞いて刺激をもらったのは事実ですが、一過性のもののため今は専ら、落ち着いています。しいて挙げるならば、卒業のための修論をがんばります！

山内　些細なことですが、人とのコミュニケーションを多くとるようにしたいと思っています。

――活動支援金等の使い道は？

座間　種を買います

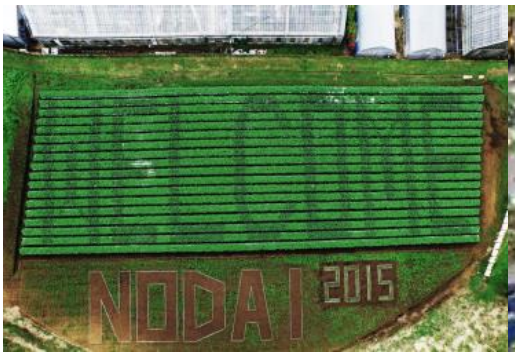
原田　みんなでご飯を食べに行きたいですね。もちろん、お世話になった先生や職員方も含めて。

意外と多くの学生も挑戦したくてウズウズしているのかも

――最後に、これから学生の活動支援をしたい、しようと思っているオトナたちにアドバイスを！

高田　今回、学生スタッフを募集したら、なんと40人を超える学生が集まってくれたんですよね。正直、驚きました。
常日頃、意外と多くの学生の中で『何かに挑戦したい』ってウズウズしているのかもしれません。
それと、今回の体験で多くの来場者に喜んで頂いたんですが、そんな笑顔をみて、学生スタッフもなんだか、イキイキとしていたんですよ。もしかしたら、『人を喜ばせる喜び』に気付いたのかもしれません。自分はこれってすごく大事なことだと思います。こういった活動をすることで、普段の授業で学べないことを得る、良い機会になると感じています。
でも学生全体が、『チャンスに飛び込める』側の人間とは限らないんです。そんな学生がこういった活動に参加できるように環境を整えたり、背中をそっと押してあげること。図々しい物いいかもしれませんが、オトナの方々にはそういったことをして頂けたら、大学ってもっといいものになるんじゃないかなって思いました。

小林　自由にやらしてあげてください。どっかの某球団は、金は出すが口は出さんというスタイルでうまくいってます。このように、チャレンジにはお金が必要ですが、大人は目先のことに捉われ、出資をしぶります。大いにやらしてあげてください、大学生ですし、事の重大さも理解できます。答えは自ずと出てきます。



「全国の仲間」に会いたかった。

常磐大学
TSS支援チーム

**学校をもっとわくわくする場所に！
そんな想いでできたTSS支援チーム。**

伝えたかった思いや他団体とのやり取りから感じたことを振り返ってくれました！

左から若林くん・森さん・米久くん・堀米くん・大川くん

大変でも、仲間の存在があったから乗り越えられた

――なぜFilに参加を？

若林　まず何よりも、自分たちと同じように、仲間と切磋琢磨しチームの目的に向かって日々努力しているチームに会える、そして会いたいと思ったからですね。
自分たちの活動を発信したい気持ちや、Filを通して学びたい気持ちもあったのですが、その気持ちは、最初の気持ちの後でした。だって、「全国の仲間」に会えるのですから。

――発表準備の中で気づいたことは？

米久　今回のFilの発表の準備をする中で「仲間の存在の大切さ」というものを非常に感じました。そう感じた理由は、発表の準備をする上で、仲間の存在に助けられたからです。
私たちは、普通にプレゼンをすればよかったものをあえて「コント」という方法でプレゼンをさせていただきました。この選択が、つらい日々を送るきっかけとなりました。なんせコントを作るなんて全員が初めてのことでしたので･･･。
それからは大変。当日まで準備に追われ、総打ち合わせ回数が31回ととんでもないことになってしまいました。
そんなハードスケジュールの中で、当日まで心が折れずに準備をしてこれたのは、「仲間の存在」があったからです。こんなに大変なこと、1人だったら序盤に心が折られていたことでしょう。しかし、「仲間も頑張って資料を作ってくれている、名刺を作ってくれている」と考えることで「自分も頑張ろう」と思うことが出来ました。
確かに、組織で活動することで出てくる課題というのは、とても面倒で簡単に解決できるものではないと思います。ですが、同じ苦労を体験した仲間との絆に代えられるものはないと思うので、後輩たちにはぜひ仲間を大切にしてほしいと思います。

チーム内の課題を伝えることこそ、学びのツールになると思った

――Filで一番伝えたかったことは？

若林　私たちが伝えたかったことは、これまで私たちがどんな活動をしてきたのか、そしてそのときに起きたチーム内での摩擦でした。
なぜこのことを伝えようとしたのかというと、私たちは2年間活動してきましたが、それを伝えようとみんなで話し合いをしているときに出てきたのは、チーム内の課題に取り組んできたことでした。それならば、その課題に取り組んできた姿を伝えればいいと逆の発想をし、決めました。また、そこから、見ていただいた方々に、どのチームでも同じような問題を抱えていること、それをコントとして客観的に見てもらうことで、それぞれの活動と照らし合わせて気づきを得てもらうことも、隠れた狙いではありました。
Filは学びの場ですからね。

――それは伝わった？

若林　うーん、伝わらなかったと思います。発表の後の質疑応答では、内容を踏まえた上での質問ではなく、内容の確認をする質問が多く、また、発表後は各グループのTSS支援チームメンバーに、発表で分からなかった部分の質問がとてもあったらしいです。
原因としては、コント形式の発表を選んだとき、摩擦を面白おかしく伝えられればというのも一つの理由だったのですが、その結果笑いの部分が多くなってしまい、肝心の内容が少なくなってしまったことですね。
コントでのプレゼンの課題でもありますね。

――メッセージカードにはどのようなことが書かれていましたか？

森　「コント面白かった！」と「コントよくわからなかった！」でした。
まあこうなるだろうなと大方予想はついていましたが、ここまではっきり分かれると思わず笑ってしまいます。
ですが、私達がこだわりをもって、最後までやり遂げた「コント」というものに多くの方が着目してくださったこと、とても嬉しく感じています。
人は「普通」でないことを恐れます。ですが私達は「普通」ではいたくない。「普通」から外れた私達を、真正面から見て、聞いて、感じて、素直に、言葉として残して頂けたことに、感謝しています。

負けたくない、そう思った

――他の発表を聞いて感じたことは？

森　一言で言うなら「負けたくねぇ！！」ですね。
どの発表にも「熱」が込められている。「熱」は実際に考えて、動いた者にしか発することが出来ない。そしてその「熱」は伝染する。伝染した「熱」は、「熱」に溶け込む。その「熱」を動力源として、私達は考えたい。動きたい。どの団体よりも、一番に！

――Filに参加して1番良かったことは？

大川　他の団体はどんな活動をしているのか、活動に対してどんな気持ちで臨んでいるのかが聞けて良かったです！
グループワークや発表を聞いて、課題に対して前向きに捉えようとする姿勢を見れたことや同じ悩みを共有できたことが参加して良かったなと思いました！

――Filでの話し合いで気づいたことは？

米久　自分が「井の中の蛙」であることを感じました。私たちのグループは、アウトドアな方々が多く、発表者や見学者の地域の話になっても「そこ行ったことあるよ！」といったように、置いて行かれることなく話が出来ているように感じました。逆に自分は、茨城県を出たことがほとんどなく、知らないことばかりで質問すらできない状況でした。
この経験から、話の引き出しをより多くするために実際にいろんなところへ行ってみたいと感じました。現地に行くことで学ぶことはたくさんあると思いますので、それらを社会に出てから活かしていきたいと感じました。

――「すごい！」と思った団体は？

堀米　やはり関西大学の「恋する学問」さんはすごいなと思いましたね。
まず驚いたのは、自分たちで授業を作ってしまうということでした。作れる環境であったからということもあるのかもしれませんが、少なくとも自分たちは授業を作るなどとは考えたこともありませんでした。そもそも、「授業」というものから知識やスキルを得て「活動」に使うとか、活動から得たものを学生生活に使うとか、そういうレベルでしか考えていませんでした。
また、恋する学問さんが言っていた「恋心」は、それこそ本当に誰もが持っているもので、自分も含め会場にいた学生団体は特に強い恋心だと思うので、受け入れやすい・わかりやすい概念でした。なんで、どうしてといった疑問などを「恋心」と言う発想もなるほどなってなりました。
これからも、「恋する学問」の授業、続けてほしいと思います。

活動を通してコミュニケーションへの苦手意識が薄れた

――TSS支援チームでの活動を経て、他の生活に影響があったことはありますか？

堀米　一番役立ったと思うのはコミュニケーションです。活動を行う上で、TSS支援チームメンバー間でのやり取りは頻繁です。遊びにしろ、活動にしろ、意見交換はもちろん面と向かって話をすることは多くなります。そうしていくうちに自然とコミュニケーション能力が上がりました。
自分は、どちらかといえば人見知りで奥手で、人と関わることは得意ではありませんでした。ですが、活動で自然と必要になり、学科の友達など話せるようになったのは確かです。
また、TSS支援チームの活動は「自由」です。学生の自由な発想から企画が生まれます。そんな団体にいたので、自分の卒業論文も、自由な発想で書くことができました。

――新たに始めているチャレンジは？

大川　自分たち以外の発表を見てたくさんの刺激を受けました！その中では新入生に向けたイベントを企画したいなと考えています！

――活動支援金等の使い道は？

大川　メンバー内で話し合って、活動に必要な備品に使うことにしました！
具体的に何を買うのかは検討中です！

学生の「発想」と、大人の「知識」が合わされば不可能なことなんてない

――最後に、これから学生の活動支援をしたい、しようと思っているオトナたちにアドバイスを！

米久　学生の私から言うのはとても気が引けますが、教職員や大人の方々には、ぜひ学生と向き合って、「やりすぎ？」と感じるくらい一緒に活動をしていただきたいです。もちろん仕事との兼ね合いもあるので、調整が難しいとは思いますが、学生たちはみなさんのお力を求めています。私たち学生は、「あれやりたい」、「これやりたい」と様々な想いを持ち、実現しようとします。しかし、所詮は未熟者、能力もなければ技術もありません。やりたくてもできないのです。そんなときに必要なのが、人生経験が豊富で、数多くの知識や技術を身につけている大人のみなさんなのです。学生の「発想」とみなさん大人の「知識」が合わされば不可能なことなどないのではないでしょうか？やる前から諦めるのは早くはないでしょうか？学生は、やる気だけは大人のみなさんに負けないのでは、と思います。
失礼な話ではありますが、学生と向き合うことで大人のみなさんも学ぶことはたくさんあり、より成長できるのではないかと思います。もし、学生と一緒に活動することを迷っている方がいらっしゃれば、ぜひ思い切って参加してほしいと心から願っております。

次の目標は「ブランド化」

東京都市大学
ラーニングコモンズ

2015年春に新しくオープンしたラーニングコモンズ。
ラーニングコモンズ運営の中でも、Filでも「自分たちと異なった人たち」との関わりの中で、自身の成長や研究へのフィードバックを感じてくれています。

左から高橋さん・森さん・佐々木くん・水野くん・山本くん、三浦くん、小田くん

準備しながら、受け身だった自分を実感した

――なぜFilに参加を？

小田　我々の活動をいつも支えてくださっている先生から、「こういった場があるけど興味ある？」と声をかけていただいたのが知ったきっかけでした。活動を色々な人に知ってもらいたいというのが発表を決めたポイントです。

森　自分たちの活動が、外部から見たときどのように映るのかが知りたかったのと、まだまだ利用者である学生の意見があまり得られないため、客観的な意見が欲しいと思ったからです。

――発表準備や発表をしたことで気づいたことは？

佐々木　発表の準備する際に自分が活動に対して受け身でいることに気が付きました。これからは受け身ではなく積極性を持って活動に取り組みたいと思いました。

小田　発表の準備をしていく中で、我々の活動に何が足りていなかが見えてきました（笑）。これにもっと早く気付けていれば…という反省と、これに気づけたのだから来年からまた頑張っていこうという前向きな気持ちが生まれました。

森　大学側からの指示でやり始めたことなので、活動にあまり自主性が見い出せていなかった事。また、自身の役割を重視しすぎてあまり全体が見えていなかったなと。

――Filで一番伝えたかったことは？

森　運営する立場であっても完璧である必要がないこと。教えを受けるのも学生ならば教える立場も学生なので、無理に構えず自分なりに振る舞えば良いと言うことを伝えたかったです。

――それは伝わった？

森　ある程度伝わったと思う。アンケートで共感してくれた意見が多かったので。

共感してもらえるうれしさと、それが自信にもつながった

――メッセージカードにはどのようなことが書かれていましたか？

小田　「うちの大学にもこんな活動をしている団体が欲しい！」というありがたいメッセージを多数いただき、非常にうれしかったです。また「教えている側が多くのことを学んでいる」という点には多くの共感を頂き、「それでいいんだよな」と自信にもつながりました。

森　教える立場でもわからない場合があってもいいという点に共感していただいたので、うれしかった。

――Filに参加して1番良かったことは？

水野　正直申し上げますと、今回の発表の趣旨である「失敗した点、それを乗り越えて成長できた点」を盛り込むことは、発表の準備を行いながらことごとく苦手な分野だと何度も感じさせられました。成果ではなく過程を魅力的に表現して観客にインスピレーションを与える「スピーチ」が、私たちが普段行っている「研究発表」とは全く異なることだったからです。ある意味では、この発表を行うこと自体が既に私たちの新しい試みでした。
かなりしっかり作成したので、同時に発表のコツみたいなものが見えて、その後に控えていた研究発表にもうまく生かすことができました。

山本　自分とは環境が大きく異なる他大学の人と話す機会ができて良かったです。積極的に活動する人たちがどういう想いで、その活動を始めたかを聞けて参考になりました。

――Filでの話し合いで気づいたことは？

森　自主的に考えること、とりあえずやってみることがまず第一であることを再認識した。

小田　「研究と活動の両立は大変じゃないですか？」という質問を多数いただいたのですが、これは裏を返すと、両立に苦労している人が沢山いる。ということなのかと思います。そういった時間などのマネジメントのノウハウを共有することができればいいなと思います。

水野　時代が変わり、就職活動や研究に忙しい4年生や修士は、直接的に無関係な労

力を要する事柄を嫌う学生も少なくありませせん理系学部だからというのもあるのかもしれませんが、少なくとも私の周りでは優秀な学生ほど「時間＝コスト」として非常にシビアに考えています(社会の即戦力を目指す大学の趣旨にはかなっているわけですが)。そうなると、コストをかけてもいいと思える環境や仕事、コスト分を支払ってくれる制度など、時代の変化と実際の学生ニーズとも一緒に考えなければならないと感じました。

山本　次の年度になると、人の入れ替えがあり、個人の意識や全体の雰囲気が変化していくという意見もありました。守り続けたい意識とその代ごとの雰囲気を上手く両立させることが課題だと思います。そのためにも、これまでの活動の位置づけや成果を再確認し、議論の場で個人の意見を共有していく方法が重要だと感じました。

自分がどう感じたかを表現するのがとてもうまいと感じた

――他の発表を聞いて感じたことは？

小田　主体的な行動をしている学生って、個性的な人が多いなと思いました(笑)。そういった人たちが増えれば世の中はどんどん面白くなっていくと思うので、どんどん活動の幅を広げていってほしいなと思います。私も頑張ります(笑)

山本　その時、自分たちがどう感じたかを上手く表現していて、人を引き付ける素晴らしい発表だと感じました。共感できる部分や印象に残る言葉などもあり、参加者の意識を変える力になったと思います。

――「すごい！」と思った団体は？

小田　「恋する学問」さんです．学生が授業を行うと初めて聞いたときには目が点になりました(笑)。実際にプレゼンを聞いていても「恋愛」と「学問」という全く違うジャンルの単語を結び付けるという試みや、聞いているこっちまで「ドキドキワクワク」するような魅力的なお話だったかと思います。

水野　どの団体も魅力的でしたので選び難いのですが、東京農業大学の「だいこんアート1万本アートプロジェクト」です。だいこん1万本を育てること、約4000人の方々に大根をもてなすことなど、企画の規模が今回の発表のなかで一番大きく、その裏で運用してらっしゃった方々は本当に大変だったのではないかと思います。しかしその努力が実り、学生・企業・地域を巻き込んだ魅力的なイベントを達成したことに心から敬意を表します。

山本　「恋する学問」です。学生が授業を行うと聞くと、大学側との交渉や事務的な部分でも大変だと思いますが、自分たちを応援してくれる大人がいることに気づき、上手く周りを巻き込みながら実現させたことはすごいと思います。受講者の雰囲気や意見をもとに授業ごとに改善していくのは、忙しい中とても苦労されたことだと感じました。

――ラーニングコモンズでの活動を始めて、他の生活に影響があったところはありますか？

水野　私たち運営幹部に関して、博士後期課程の学生が学科を越えて人が集まり何かに取り組むこと自体、大学として大変珍しいことではないかと思います。ラーニングコモンズの運営だけに留まらず、学部の研究内容や方法の話題だけで朝まで飲み続けられるぐらい、お互いに良い刺激になっています。また、全員がそれぞれの学科を代表する存在ですので、何かアイディアが浮かぶと、誰かがそれを実行できるスキルを持っているので、すぐに相談や行動に移すことができる利点もあり、活動が広がりました。

――新たに始めているチャレンジは？

水野　東京都市大学のラーニングコモンズの任期は一年を区切りとしています。今年は運営初年度ということもあり、学生により親しみやすい環境の構築を進めてきたわけですが、私個人の来年度の目標としては、もう一歩進めて学習相談デスクとそこで働くサポーターを「ブランド化」していきたいと考えています。

小田　発表後の質疑応答で、「他大学にある同様の取り組みをしている団体と連携してはどうか？」と言ってもらえたことが非常に印象に残っています。
個人的に、これは是非取り組んでみたいなと思っています。学習相談デスクなどの環境、サポーターが着用する服装、ポスターやホームページなどの告知関連にいたるまで色彩を統一化し、より魅力あるデザインを提案とすること。そして、サポーター自体もまた魅力あるものとして演出し、相談した学生が私もサポーターになってみたいと思ってもらえるようにすること。そしてややオーバーですが最終的にはサポーターになることが「名誉」とされるまでに昇華していきたいと思っています。

――活動支援金等の使い道は？

今回の発表の反省会(と称した飲み会)の資金として使わせていただきました。

キッカケとなる呼びかけ、そして資金的なバックアップを

――最後に、これから学生の活動支援をしたい、しようと思っているオトナたちにアドバイスを！

森　学生活動をしたいと思う学生は少なくないけれど、行動を始められる人は少ないんだと思います。。なので、キッカケとなる呼びかけを積極的にしてもらいたいです。

水野　現実的な問題として、学生活動とはいえ良いことがしたければ多くの資金がかかります。私たちの場合、サポーターの人件費は賄われましたがそれ以外の雑費はまったく計画に入っておらず大変苦労しました。積極的に活動をする学生は優秀ですので、必ず資金に見合うクオリティを出します。是非寛容になって頂ければと思います。

同じ悩みや思いを持った人と出会えた

北九州市立大学
地域共生教育センター（421Lab.）

唯一海を渡ってきてくれた421Lab.のみなさん。
普段出会わない人たちとのやり取りの中で、様々な気づきを持ち帰ってくださったようです。

今後のなりたい姿を考えるきっかけになった

――なぜFilに参加を？

佐藤　自分たちの活動について知って欲しいと思ったからです。
また、他の団体の発表から自分の視野を広げたり、今後の活動のヒントを得たりと、自分自身や双方の団体の発展になればいいなと思って参加しました。

――発表準備や発表をしたことで気づいたことは？

佐藤　準備をする中で、自分たちの出来ていることと、出来ていないことを再度見直す機会になり、活動の目的や今度なりたい姿について考え直すきっかけになったと思います。

米村　自分自身の2年間の活動を振り返ることができました。振り返ったことで、より活動に向き合うようになったという成長を実感し、その一方で、もっとできることがあるのではないか、役割を果たせていないのではないかという課題にも気づくことができました。

――Filに参加して1番良かったことは？

佐藤　他大学の人たちと交流することが出来たことです。私は、今までこういった活動に参加していなかったため、様々な視点をもった人と意見交換が出来て楽しかったし、刺激になりました。

――メッセージカードにはどのようなことが書かれていましたか？

米村　長年続く活動への共感や、地域と大学がつながった活動への激励・応援の言葉などを頂きました。
学生スタッフはサポート組織であり、活動内容が伝わりづらいこともありました。今回頂いたメッセージカードで、共感や応援の言葉を頂くことが出来、とても励みになりました。

自分たちの役割を再認識することができた

――Filでの話し合いで気づいたことは？

米村　「学生運営スタッフ」という存在がいる意味や役割を見直すことができました。
また1年生と2年生でプレゼン作りを行ったことで、今まで上級生同士でのみ話していたことを後輩たちと共有でき、チームとしての一体感・同じ目標を見ることができたと思います。

集まった人全員が、成長を望んでいた

――他の発表を聞いて感じたことは？

佐藤　全く同じ活動をしてはいないけれど、みんな同じ悩みや思いを持っているのだと感じたこと。
例えば、メンバーのモチベーションであったり、広報の仕方であったりと共通のものがあると共感出来ました。そして、全員が今後の活動に前向きでもっと発展させたいと思っているところが素敵だなと感じました。

――「すごい！」と思った団体は？

佐藤　やはり、恋する学問です。発表の内容や活動への思いもさることながら、グループディスカッションの間ずっと質問を行ったり、交流を他のどの団体よりも積極的に行っている姿を見て、すごいと感じていました。

様々な人と接し、話す機会は、他ではなかなか無い

――421Lab.での活動を経て、他の生活に影響があったことはありますか？

米村　学生・先生・地域住民など、様々な人と話す機会が多くあるため自然とコミュニケーション力が身についたと思います。
また活動発表などで人前で発言をする機会も多いため、人前で話すことへの苦手意識がなくなり、自信を持って喋ることができるようになりました。
また、「地域に出て活動を行う」という経験は

他ではなかなかできないことなので、就活の際にも自己アピールの経験談として良い話がたくさんできたという先輩方の声も良く聞きます。

――新たに始めているチャレンジは？

米村　他団体さんとも、全く同じではないにしろ通ずる部分があるので、今後もどこかで繋がっていけたら嬉しく思います。そして、421ラボでの活動は私たち運営スタッフだけではありません。様々な地域課題に対して、様々なチームが活動を行っています。次のFilでは、ぜひ421Lab.の他のプロジェクトも出場させて頂きたいと思いました！

――活動支援金等の使い道は？

米村　考え中です！！案の一つは新入生が入ってきた時の新歓代（1年生の分）として使おうかなと･･･。7月には学祭や地域の夏祭りなどで出店の機会があるので、そこで使った分以上の売り上げを出すことを目標にしてもらおうかなと･･･。

今回質問に答えてくれたのは、左から米村さん、佐藤さん

自分たちの力量を知って 次のチャレンジが見えた

東京国際大学
川越フロンティア

授業を引き継ぐ形ではじまった川越フロンティア。
川越が好きな学生が集まり、小江戸川越を若者の力で盛り上げたい！と集まったみなさん、発表も、インタビューも「川越愛」に溢れています。

私たちにできること、それは川越のことを知ってもらうことだと思った

――なぜFilに参加を？

笹原　私たちの活動の総括として、学校の外の方々に、川越専科冬号を作成したことを伝えたいと思ったのがまず、大きな理由です。そして、同時に地元の宣伝にもなれば一石二鳥だと考えました。
埼玉は“ダサいたま”と巷で言われるほど人気が乏しい県です。しかし、実際には魅力がたくさんあります。私たちにできる埼玉県の宣伝は小江戸川越の事でした。だからこそ、使命感を持って地元のため、私たちの今後の活動のために発表しようと思いました。

――発表準備や発表をしたことで気づいたことは？

笹原　私たちの活動が川越で約20万部も配られるフリーペーパーとして一つの形になったことが、改めて凄いことだと実感しました。準備期間の中で、COCスタッフの落合さんが「実は川越専科を作った実績は学校からもすごく評価されています」と私たちに話をしてくださいました。
私自身、度重なる試練に苦戦しながらも、川越フロンティアというチームだったからこそ、納得するものを作り上げることができたと思います。また、メンバー各々のハードなスケジュールの中でも、連絡を逐一取り合えた自主性にも感謝です。

――Filで一番伝えたかったことは？

笹原　何よりも、見てくださっている全ての人を楽しませたいと思いました！
私たちの発表は、先生が授業をするようにプレゼンをすると、暗く、後味の悪いものになり兼ねませんでした。しかし、発表する内容の根底である川越は古き良き蔵造りの街並みがあり、駅前のクレアモールには若者が集い活気がある、楽しいところです。そのイメージを軸に、大学生らしい楽しいプレゼンをしなければと考えました。

――それは伝わった？

笹原　伝わったと思います。プレゼンの最中、笑ってくださる方がたくさん見受けられました。少しトーンの下がった話の中では、相槌をうってくださる方も多く、飽きずに最後まで話を聞いてくださる効果も図らずあったかもしれません。
同時に、小江戸川越という固有名詞も覚えていただけてたら、本望です。

自分たちのやってきたことが認められた誇りを感じた

――メッセージカードにはどのようなことが書かれていましたか？

勝俣　「川越に行ってみたくなった。」「20万部も発行される川越専科を大学生が作り上げられるのは凄い」という意見を多くいただくことができました。
自分達がやってきたことが、認められ誇りに感じられました。多様な意見を聞くことで、視野が広がりました。今後に活かしていきたいです。

――Filに参加して1番良かったことは？

安田　同世代と交流したことで、自分たちの力量を知れたことです。どの団体も試行錯誤を繰り返しながら、手探り状態で一つの目標に向かっており、活動内容は違えど、みんなが努力をしていました。
そして発表後のフィードバックで、今の自分たちに、足りないことはなんなのか、その足りないものを補うためにはどんな努力をすれば良いのかということを知れたことで今後が開けたように感じました。

一人ひとりが発言し、お互いの意見を尊重していた

――Filでの話し合いで気づいたことは？

勝俣　自分とは生まれも育ちも違う人が同じグループに集まっていたので、多種多様な意見、考えがあり、楽しかったです。また、一人一人が発言し、その意見を全員が尊重していました。同じプレゼンを見ていたはずなのに、自分とは違った視点からの意見を聞くことができました。
また、話し合いの中で、川越に行ったことがあるという方がいらっしゃいました。その方は、「小江戸の古い街並みは歩道が狭くて歩き辛かった」と仰っていました。このような意見を受け取ることで、これからの川越フロンティアの話し合い、ブレインストーミングのトピックになっていきます。

それぞれ、必ず葛藤や壁を乗り越えようとしていた

――他の発表を聞いて感じたことは？

安田　熱意のある学生が他大学に多くいることに感動しました。そして、それぞれの活動の中でみんな必ず葛藤や壁を乗り越えようと格闘していて、自分たちの理想を叶えようとしているんだと感じました。
また、プレゼンテーションと括っても表現方法に個性があり、面白かったです。プレゼンテーションの幅は広いと感じました。多様なプレゼンの表現方法にチャレンジしてみたいと思いました。

――「すごい！」と思った団体は？

笹原　恋する学問さんです。
学生が授業を作り、毎回授業通信を発行しているという「継続する努力」がとにかくすごい！と感じました。私の想像を逸する活動を裏で地道にやってきたんだ、と発表を聞いて感じました。

活動をするようになって、学生生活が豊かになった

――川越での活動を始めて、他の生活に影響があったところはありますか？

勝俣　川越フロンティアとしてインターンシップを通じて、社会の厳しさを体感し、就職へ向けての心構えが出来ました。活動があったからこそ知り合えた繋がりもたくさんあり、参加して良かったと感じています。
また、学生生活が楽しく、豊かになりました。

――活動支援金等の使い道は？

勝俣　チームとして、交通費や交際費に充てました。

――最後に、これから学生の活動支援をしたい、しようと思っているオトナたちにアドバイスを！

勝俣　私たちは人生経験が浅く、知らないことも多いで学生たちです。
しかし、みんな川越という街を大好きでただひたむきに地域活性化の活動しています。人生の先輩方に自分たちの活動の良い点、改善点をあげていただけると嬉しいです。

今回質問に答えてくれたのは、左から安田さん・勝俣くん・笹原くん

応援してくれる人がいる、それだけで心強い

梅光学院大学
Buchiサポーター

新入生に少しでも早く大学に安心して通ってもらえるように、様々な形で新入生支援をしているBuchiサポのみなさん。
伝わったことで共感してもらえたこと、伝える難しさを感じたことなどを振り返ってくれています。

――なぜFilに参加を？

石田　私たちの活動を伝えたいという気持ちがあったのと、また、他大学の方がどのような活動をされているのか知りたいと思ったからです。

――発表準備や発表をしたことで気づいたことは？

長野　自分の得意分野が見つかった。僕で言うと、パソコンかな！パワーポイントとかあんまり作ったことなかったけど、こういうことできるんだと思った。

自分たちの立ち位置や、活動内容について、大学ごとに違うからこそ伝えるのが難しかった

――Filで一番伝えたかったことは？

長野　自分たちがファシリテーションをしていること。Buchiサポーターの個性を伝えたかったから。

戸田　先輩にサポートしてもらって、今度は自分が後輩にサポートするという循環ができれば、ということを伝えたかったです。

――それは伝わった？

長野　学生がファシリテーションするという点はよく伝わったと思う。
しかし、サポーターとはどのような活動をするのか、ということや、Buchiとしては何をしているのかということが、大学ごとにサークルや委員会の位置づけが異なっていることなどから、こちらが伝えたいと思ったとおりのニュアンスでは理解してもらえなかったように感じました。
でも、最後の懇親会の時間に何人かの方にはしっかりと伝えることができたのではないかと手ごたえがあったのでよかったです。

――メッセージカードにはどのようなことが書かれていましたか？

長野　スタートの動画を褒めてもらえて嬉しかったです。

石田　共感します。という言葉がとても嬉しかったし、これからの励みになった。私たちの活動に興味を持ってもらえているように感じ、嬉しかったです。

戸田　自分が新入生のときにも抱えていた不安が書かれたメッセージカードがいくつかあったので、Buchiサポーターは新入生の不安に寄り添いながら活動できているんだなと感じることができました。

――Filでの話し合いで気づいたことは？

長野　グループ内で話せるようになるまで時間がかかったので、アイスブレイクの時間がほしかったなあと思いました。

何より、東京に行けたこと！

――Filに参加して1番よかったと感じたことは？
長野　他大学の先生に名刺をいただいてかかわりが増えたし、ほかのグループの活動を知ることができたことがよかったです。

石田　グループで意見交換をするときに、「大事なことは基礎があってその上にオリジナリティーをつけていくからこそいいものができるんだ」というお話をしてくださった方がいて、すごく心に残っています。
いろんな方の考えを聞くことができたことが一番よかったです。

全員　そして、東京に行けたことがよかった！

悩みや葛藤を乗り越えていく励みになった

――他の発表を聞いて感じたことは？

戸田　Buchiサポーターもそうですが、他のグループも地域や学校に根付いた活動をされていることはどの団体にも共通しているんだと思いました。

長野　どこの大学にも悩みや葛藤があり、それを改善するために頑張っているんだなと思いました。

石田　どのグループもよりよい活動をしていこうという前向きな姿勢があり、発表を聞いて励みになりました。

――「すごい！」と思った団体は？

戸田　「421Lab.」さんの活動がすごいと思いました。広報誌の作成過程と、それに伴っての学生の気持ちの変化についてをメインにお話されていて、特に気持ちの部分で自分たちとの共通点を見ることができたように感じました。
発表中の「頑張りたいという気持ちが新たな悩みにつながった」という言葉が印象的でした。これからの活動も頑張ってください！

――Buchiサポでの活動を始めて、他の生活に影響があったところはありますか？

石田　私は飲食業でのアルバイトをいているのですが、Buchiサポーターとして活動して人とかかわることでお客さんに対しての接客に変化があったように思います。以前よりも説明の仕方に注意するようになり、相手の目線に立つようになりました。
また、「自己の探求」を経て自分をより知ることができたので、今までより少しポジティブになれたと思います。

いてくれるだけで心強い！その気持ちを伝えてほしい。

――最後に、これから学生の活動支援をしたい、しようと思っているオトナたちにアドバイスを！

山辺　自分たちの活動を支援したいと思ってくださっている大人がいるだけで学生はとても心強いと思うので、その気持ちを思っているだけではなく学生に伝えることを大切にしてほしいです。

今回インタビューに答えてくれたのは、左から戸田くん・石田さん・長野くん・山辺くん

教職員
インタビュー

「待つ」ということは学生への信頼があってこそ

関西大学 教育推進部
三浦 真琴（恋する学問）

学生は大学の主人公である

―― Filというイベントがあるとお知りになって、まずどのように思われましたか？

三浦　今回、発表した学生は学内ではLAとして活動していますが、学外にも活躍の場があり、自分らしさを発揮しているとの評価も頂いてきました。ところが科目提案委員としての活動の場はもっぱら学内に限られています。このたびのFilの企画は彼女たちの活動を学外で報告する機会になると喜びました。また、彼女たちが提案し、実施した授業を受けていない学外の方々がどのような評価を与えて下さるのかを知りたいとも思いました。学内からの評価は既に頂いていますが、学外者による評価をそこに加えることで新たな授業創造のヒントが豊かになると考えました。

――その上で、参加してみよう、と思われた理由について教えてください。

三浦　報告をするためには自分たちの活動の経緯、あるいは思考の変遷を整理しなければなりません。それは自分たちにとっては既知の事実ですが、もしかしたら忘れてしまっていること、見落としてしまっていることがあるかもしれません。この企画に参加するからには、まずはそれを丁寧に掘り起こす必要があります。それは彼女たちにとって貴重な省察の機会になるはずだ、そのように考えました。とはいえ省察の中で得られた言葉は、そのままでは他者に受け入れられるとは限りません。他の人にわかるように言葉を選び、あるいは創りながら足跡を綴ることによって、自らの経験を身体化する（自他共に身体を有するものとして認知する）ことにつながる、そのようにも考えました。自らの経験や思考を身体化すると、「習い性となる」がごとく、実に自然にそれを行為に反映させられるようになります。それが次のステージへと進むエナジーになるとも考えました。

大学は教育を提供する機関ではなく、学習を創出する機関

――普段、学生を支援されるお立場として、何かヒントになることはありましたか？

三浦　普段は「教えない」ということをモットーにしています。教えないことが学生の学びを支援することにつながる、そのように考えているということです。大学は教育を提供する機関ではなく、学習を創出する機関である。ほぼ20年前に高らかに宣言されたパラダイムシフトを砂上の楼閣、机上の空論としないために、これを自戒としているといってもよいかもしれません。多くの発表を見聞きして、教職員と協働して何かを得たというよりは、学生が自分たちで問いを見直し、答えを探し求め、その途次、焦りや不安にさいなまれながらも仲間同士で意思疎通や合意形成を積み重ねて、ついに自分たちの言葉で表現できる地点に到着した、そんな印象を持ちました。教職員が口を出したり、手を貸したり、というようなお節介をせずに学生を見守る、それは「待つ」ということですが、学生への信頼あってこそできることだと思います。おそらく学生も待ってくれていることを自分たちへの信頼と同義と捉えたことでしょう。大学の主人公は学生であり、見守るべき存在である、それが間違いではないのだと意を強くすることができました。

――学生が主体的に学内で活動をしていくことは、大学にとってどのような意味があると思いますか？
三浦　大学の原点を思い起こしたり、確認したり、新たな可能性を探るという意味があると思います。世界最初の大学ボローニャでは学生が主人公でした。大学の原点を忘れないでいたいと思うと同時に、現在にみあった形で再考し、再構築することも大切だとも思いました。

――発表準備をしている学生たちを見ていて感じたことはありますか？

三浦　どうやって足跡をふりかえり、どんな言葉に託すのか、早く発表を見たいと思っていました。確かに歩んできた道だけれども、今まで言語化できなかったことを自分たちの言葉で表現してくれるに違いないと、とても楽しみにしていました。

――発表後の学生たちの様子は？何か変化はありましたか？

三浦　春休みに入っていたため、会う機会がほとんどなかったのですが、少しは、いや、かなり自信がついたかな、と想像しています。

――全体を通じてお感じになったことがあれば、自由にメッセージをお願い致します。

三浦　このFilという取り組みをもっと全国に宣伝してほしいと願います。その結果、Filを知らない大学が少数派になればいいなと思います。

教職員
インタビュー

教員が黙っていても、考え、動ける

東京国際大学 言語コミュニケーション学部
岩崎 暁男（ボランティアサークルWITH）

気持ちがあっても何をしてよいかわからない学生たち

―― Filというイベントがあるとお知りになって、まずどのように思われましたか？

岩崎　同僚から今回の情報をもらい、学生が主体的に行動することを支援する機関があると知り、それは学生の大きな励みになると感じました。

――その上で、参加してみよう、と思われた理由について教えてください。

岩崎　今どきの学生は、気持ちがあっても、何を具体的に動いてよいか分からない場合が多いように感じている。
このようなイベントを通して、学生たちが気持ちを一つにし、自らのアイデンティティを再確認できるのではと思い奨励しました。

教員は橋渡し役であり、黒子である

――普段、学生を支援されるお立場として、何かヒントになることはありましたか？

岩崎　特に恋する学問の話を聞いて感じましたが、学生は大学の支援体制によって変わるんだということです。まず、オフィシャルに学生提案科目という授業があることに驚きました。
本気で学生をサポートしようと思えば、学生のやる気や活動がどんどん深まっていくんだと。教員はその橋渡しをしたり、黒子となることで大学が学生の活動に対する理解を深めることにつながるとも思いました。

――学生が主体的に学内で活動をしていくことは、大学にとってどのような意味があると思いますか？

岩崎　今後、大学生活をより充実させるプログラム作成には、おもねるのではなく、学生目線は不可欠であると考えます。
旧来のスタイルでは学生に魅力的なものは提供できない。学内を活性化させるためにも最も有効な手段。学生主体の活動を促進させ、学生に『任せる』姿勢が大切だと思います。

――発表準備をしている学生たちを見ていて感じたことはありますか？

岩崎　自分たちでブレイン・ストーミングをしながら、アイディアを出しつつ発表の方向性を皆で決めていた点が素晴らしかった。とりわけ、今回の企画では何が求められているのかも含めて話し合っていた。自分が何も言わなくても、学生たち自身で動き、考えるんだと驚きました。

――発表後の学生たちの様子は？何か変化はありましたか？

岩崎　正直なところ、そのまま春休みに入ってしまい、顔を合わせていないので大きな変化を感じられてはいないのですが、メールなどでのやり取りを見る限り、自分たちのやっていることに自信をつけることができたように感じています。
昨今の学生にはなかなかそのような機会がないとも思っているので、良かったのではないかと思っています。

学生の成長には学生を支える人や組織の重要性を感じた

――他団体の学生と同じグループでの学び合いの中で、ご自身にとって一番印象に残ったことは？

岩崎　どの大学にも、しっかりとした主張を持つことと行動力を伴った学生がいること。また、それを支える大学の姿勢が介在することを感じました。それは個人であったり、組織であったりはそれぞれだと感じたが、そういった支えはやはり必要なんだと感じています。

――全体を通じてお感じになったことがあれば、自由にメッセージをお願い致します。

岩崎　イベントの数日後に、会場で名刺交換をした大学のスタッフの方からメールが入りました。春休みというタイミング的にキャンパスで学生同士が出会えない時期なだけに、すぐに何かが動き出したということではないが、その大学の連絡先を教え、何らかの交流が始められることに繋がったことが良かったのではないかと思います。まずはこの夏の活動の情報交換と、呼びかけからと学生は言ってきています。
もしかすると、このようにイベントで熱くなったものを時間をおくことなく、すぐに次なるアクションにつなげるには、この企画を開催する時期は大学の学期内の方がよいのかもしれないなとも思っています。

教職員
インタビュー

学生を心から誇りに思います

常磐大学　心理臨床センター
関　敦央（TSS支援チーム）

活動を内部完結させずに視野を広げさせたい

―― Filというイベントがあるとお知りになって、まずどのように思われましたか？

関　本当に素晴らしい企画であると感じました。大学の教職員では教えることが難しい分野に対して、常に真摯に向き合い、学生を育てていただいているラーニングバリューさんだからこその企画であると思っております。
今後も継続したイベントとして実施いただけることを切に願うとともに、私にできることは積極的に協力させていただきたいと思います。

――その上で、参加してみよう、と思われた理由について教えてください。

関　団体内ではPDCAサイクルを活用しながら活動を行っていますが、どうしても内部完結してしまうことが多いのが現状です。
自分たちが行っている活動を客観的に振り返るとともに、その内容を他者に伝え、意見をいただける良い機会であると思い参加させていただきました。

――普段、学生を支援されるお立場として、何かヒントになることはありましたか？

関　学生の主体性を涵養しながら活動するためには、アドバイスの内容やそのタイミング等の重要性、そして何よりも強い信頼関係が必要だと改めて感じました。

質保証や帰属意識の醸成にも繋がる

――学生が主体的に学内で活動をしていくことは、大学にとってどのような意味があると思いますか？

関　大学の活性化はもちろんですが、活動を通して学生の成長や必要な学びが見えやすく、質保証の観点からも非常に意義のあるものと思います。また、学生の帰属意識の醸成にも繋がると考えています。

――発表準備をしている学生たちを見ていて感じたことはありますか？

関　相変わらず土壇場までバタバタしてはおりましたが、限られた時間を最大限活かしながら準備をしている姿をみて、本当に自分たちの活動に誇りを持っているのだなと、感じました。そんな学生を心から誇りに思っています。

――発表後の学生たちの様子は？何か変化はありましたか？

関　発表後すぐに、今回の自分たちのプレゼンに対する内容を中心に、参加したメンバーを対象としたアンケート調査を実施しました。アンケート結果や他団体の学生のみなさんからいただき意見は、良かった点、課題等が客観的に指摘されており、今後の活動に活かしていこうという意識が高まったと思います。また、来年こそは！という想いがかなり強くなっております。

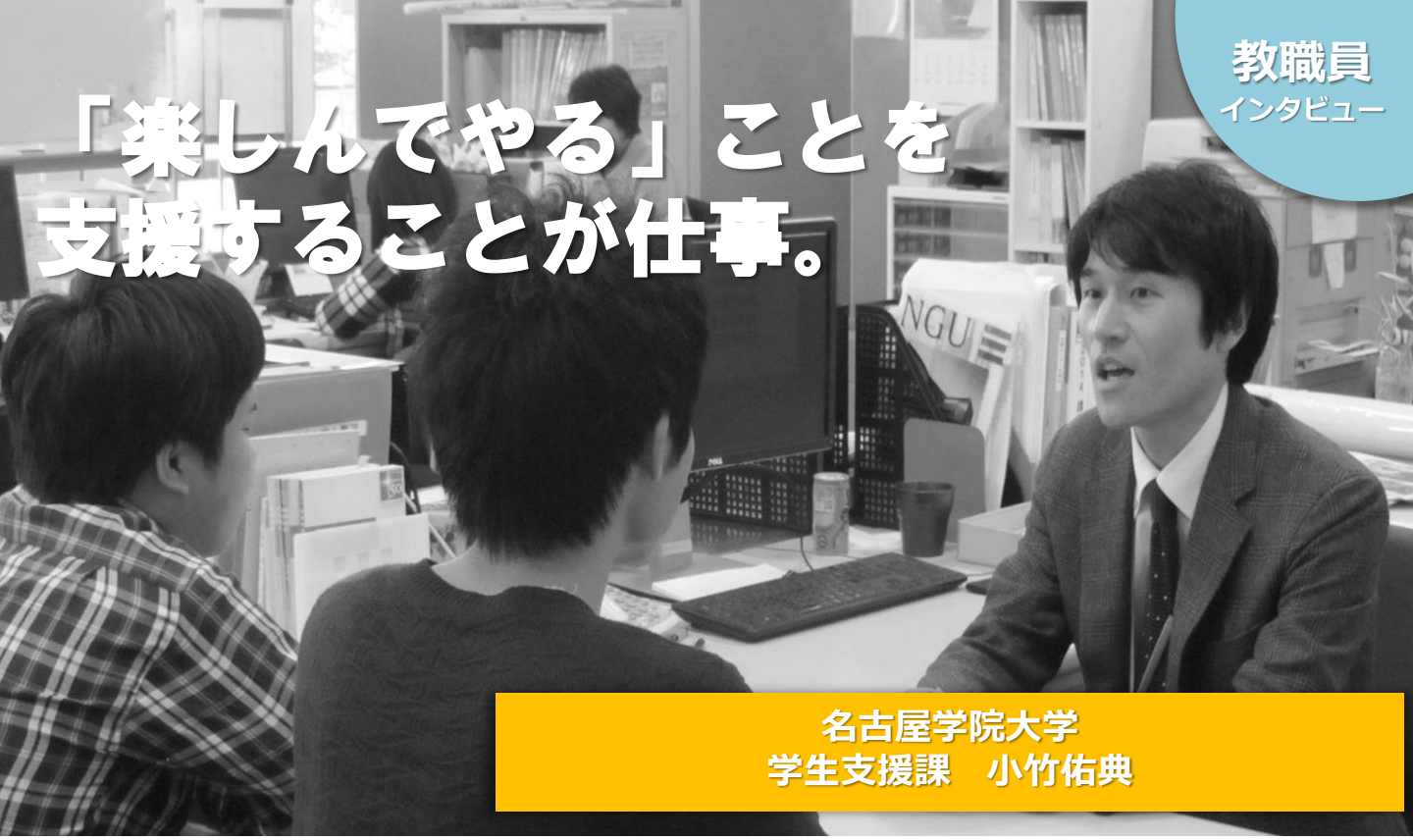
教職学がお互いに理解し、協働することが必要

――他団体の学生と同じグループでの学び合いの中で、ご自身にとって一番印象に残ったことは？

関　学生のみなさんの、活動に対する情熱をすごく感じる事ができました。活動を行う上で様々な苦労もあろうかと思いますが、自分たちの知恵と行動力で活動を成功させようとする想いは、教職員として改めて見習わなければならないと思いました。

――全体を通じてお感じになったことがあれば、自由にメッセージをお願い致します。

関　学生のみなさまの素晴らしい発表を聴くことができ、本当に有意義な時間を過ごすことができました。改めまして感謝申し上げます。
大学がより良い学びの場となるためには、学生、教員、職員の三者がお互いに理解を深め協働することが必要であり、それがあるべき姿であると考えております。
今回発表いただきました団体に関わる学生、教員、職員のみなさまは、活動をとおしてまさにそれを実践しているのだと思います。活動に参加する学生が増え、生き生きとした学生生活が送れる大学となるよう、お互い頑張りましょう！



教職員
インタビュー

「楽しんでやる」ことを支援することが仕事。

名古屋学院大学
学生支援課　小竹佑典

「学び合い」というフレーズに興味を持った

――Ｆｉｌというイベントがあるとお知りになって、まずどのように思われましたか？

小竹　全国から大学が集まっており、それぞれの活動内容も様々ということで、色々な話が聞けるのではないかと思いました。また、「学び合い」というフレーズに興味を持ちました。

――その上で、参加してみよう、と思われた理由について教えてください。

小竹　自分たちで企画し作り上げ、成長するためにチャレンジしている学生たちの発表を聴けるということで、本学の学生たちにも何等かフィードバックできることはないかと思い参加させて頂きました。

――普段、学生を支援されるお立場として、何かヒントになることはありましたか？

小竹　学生に良いタイミングで「気づき」を与えることで組織なり個人が動いていくのではないかと思いました。

教職員だけでなく、学生が学生を巻き込んでいくことが大学の発展につながっていくのではないか

――学生が主体的に学内で活動をしていくことは、大学にとってどのような意味があると思いますか？

小竹　昨今の厳しい大学環境を考えると、大学を構成する全ての教職員が団結する必要があると思います。
また、それは教職員だけではなく、大学を築き上げていくためには学生たちの力が必要不可欠です。
初めは少ない人数で取り組んでいたことも、徐々に学生が学生を巻き込んでいくことができれば、直接関係の無いように見える離籍者問題や学生の満足度にも影響し、大学の発展につながって行くと思います。

初めは嫌々でもスイッチが入ることで楽しみに変わる

――当日、学生たちの発表を聞いて一番印象に残ったことは？

小竹　「楽しんでやる」ということは大事だなと思いました。初めは嫌々でもどこかでスイッチが入ることによって、楽しみに変わります。
楽しくなれば様々な発想が生まれ、好循環になると思います。
また、そのスイッチを入れるのは私たちの仕事であるということにも改めて気づかされました。

――当日、学生と同じグループでの学び合いの中で、一番印象に残ったことは？

小竹　学生たちのエネルギーに驚かされました。
それは、他大学の学生や取組内容への関心度合いであったり、発表を聴こうとする姿勢、発表を聴いてそれに対して感じたことを話す時などです。
貪欲に吸収しようとする姿は自分自身も見習うべきであると感じました。

――全体を通じてお感じになったことがあれば、自由にメッセージをお願い致します。

小竹　ただ発表を聴くだけでなく、その後にグループごとで話し合い、共有することは素晴らしい企画だと思いました。
満足度の高い内容で、参加させて頂き良かったと思います。
今後も継続して頂くと共に、更に発展した企画を楽しみにしています！

教職員
インタビュー

学生を信じて待つこと。きっかけを提示すること。

茨城キリスト教大学
キャリア支援センター　鹿志村やよい

「自己の探求」受講後の学生に興味があった

――Filというイベントがあるとお知りになって、まずどのように思われましたか？

鹿志村　とても魅力的に感じました。普段はそれぞれの学内・地域で活動している学生が一堂に会し、お互いに刺激を受け合う良い機会になるだろうと思いました。

――その上で、参加してみよう、と思われた理由について教えてください。

鹿志村　「自己の探求」受講後の学生の変化や学生団体の活動には興味があったので、ぜひ参加したいと思いました。
また、様々な活動に参加する学生やサポートする教職員の方々と交流できる貴重な機会と考え、参加を決めました。
（できれば、本学の学生にも発表者として参加してほしかったです）

状況や個性にあった学生サポートの難しさを再確認

――普段、学生を支援されるお立場として、何かヒントになることはありましたか？

鹿志村　課題解決や目標達成の過程での、状況や学生の個性に合わせたサポートの難しさをあらためて実感しました。あわせて、学生たちの力を信じて待つ姿勢の大切さを再認識しました。
「何かに挑戦したい」「何かできるならやってみたい」という気持ちはあっても、実際には行動を起こせない学生は多いと思います。今回の企画を通して、彼らが行動を起こすためまた活動を継続するために、具体的な「何か」の提示と信頼できるサポーターや仲間の存在がポイントになると感じました。
また、学生にとって魅力的な課題・目標の提起（きっかけ作りやPRも含めて）ができるよう、今後も学内外にアンテナを張っていきたいと思います。

――学生が主体的に学内で活動をしていくことは、大学にとってどのような意味があると思いますか？

鹿志村　学生目線で学校や地域の課題を見出し、学生なりのやり方や観点で解決・活性化に取り組むことによって、他の学生にとってもよい学びの場（大学だけでなく地域も含む）が創れると思います。
また、学生が活動を通じて地域や企業や他の団体と協働し、良い関係を構築することは、大学にとってもメリットになると思います。

自分たちに愛着と誇りを持っていることを感じた

――当日、学生たちの発表を聞いて一番印象に残ったことは？

鹿志村　どの団体も、自分たちの団体や活動に愛着と誇り持っていることがひしひしと感じられました。
活動に対して最初から意欲的な学生ばかりでなかったことも良かったです。与えられたきっかけに勇気をもって一歩踏み出したことで、想像以上の成果やメリットを得られたという学生の実感が印象的でした。

――当日、学生と同じグループでの学び合いの中で、一番印象に残ったことは？

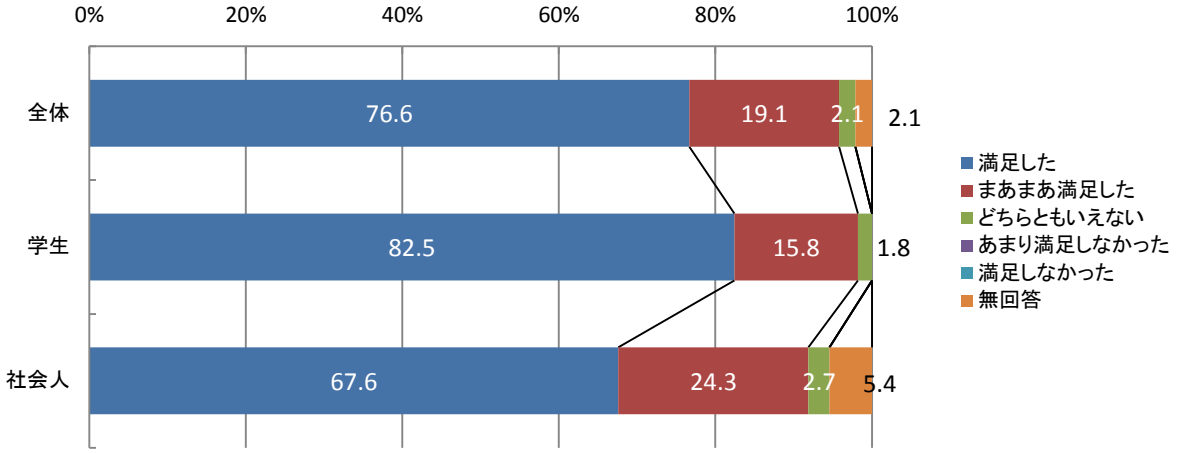
鹿志村　初対面同士でも、積極的に討論や意見交換ができたことが印象的でした。活動を通して学生同士や社会人とのコミュニケーションに慣れ、自分に自信を持つことができているからと思います。

当日アンケート報告

■本日の満足度について

学生は**活動内容が異なっていても悩み・問題は同じ**だと受け取った方が多かったようです。悩みや問題に対する向き合い方の違いから刺激を受けたという声もありました。

社会人からは**学生のイキイキとした本音の発表や活発な質疑応答の姿**を感じられたこと自体が満足度に繋がっている様子が伝わってきます。



	ｻﾝﾌﾟﾙ数	満足した	まあまあ満足した	どちらともいえない	あまり満足しなかった	満足しなかった	無回答
全体	94	72	18	2	0	0	2
		76.6	*19.1*	*2.1*	*0.0*	*0.0*	*2.1*
学生	57	47	9	1	0	0	0
		82.5	*15.8*	*1.8*	*0.0*	*0.0*	*0.0*
社会人	37	25	9	1	0	0	2
		67.6	*24.3*	*2.7*	*0.0*	*0.0*	*5.4*

（上段：人数，下段%）

コメント抜粋

学生

- ◆ どの団体さんにも、チームで1つの想いに向かって頑張っていることがすごいなと感じました。また同じ学生として、いろいろなことをしている学生がいるんだなと、自分も何かやりたいと思うようなきっかけになりました。
- ◆ 他大学にもこんなに活動を一生懸命行っている方たちがいると知って元気になりました。苦労して必死にがんばっているんだなと思い、自分もがんばろうと思いました。
- ◆ 私たちの団体で問題になっていることが、他団体でも同様なのが分かりつつも、他団体はもう一歩踏み込んでとりくんでるので、私たちもまだまだだとも思えた！
- ◆ どこの団体も、根本的に同じような思い、同じような悩みがあるなと思った。
- ◆ 学生が主体となって取りくむ活動は、やはりエネルギーがあっていいなと思いました。また、自分の所属している団体が抱えている問題や悩みを持っている他の団体さんも多いことに気づきました。

社会人

- ◆ 学生1人1人が、皆ステキです。進行していくと、質問自体がさらにクオリティが上がる。今日、この場でも、この1日での成長を感じました。
- ◆ 学生たちが活き活きと自分たちの活動を紹介している姿ですかね。
- ◆ 各団体が、様々な課題を持ちながらも、それを乗り越えていく姿に感動しました。
- ◆ 誰もが主人公として活き活きと活動していること。その発表には気負いがなく、自然な感じがしていたこと（かな）です。
- ◆ 学生目線や本音も含めてありのままの学生の表現から、若芽が成長するプロセスを実感できました。
- ◆ 何かに一生懸命とりくんでいる学生は、その活動を通して着実に成長していっていること。
- ◆ 発表が進むにつれ、活発な質疑応答がなされてきたこと。核心的な質問が多くて良かった。

■グループ内での「学び合い」について（学生のみ）

同じグループにいる大人（教職員・企業人・ファシリテーターなど）とのグループ内でのやり取りはとても貴重で新鮮だったようです。
また、活動内容が違っても共通点はあること、それぞれの団体のカラーなど「話してみてわかることがある」という気づきも多かったようです。

コメント抜粋

◆ 他大学の学生や、職員さんからの意見は、普段なかなか聞けるものではないので、大変貴重だと思いました。自分にない視点だったり、考え方を知り、アドバイスを受けたり、とても良い時間でした。
◆ 団体は違くても、同じ悩みを抱えていたり、同じ境遇で頑張っている仲間がいて、話をすることって大切だと思いました。
◆ 話をしている中で互いにの団体が抱えている課題などの話題になり、どこの団体も抱えているものは似ていることが分かり、また情報共有もでき良かったと思っています。
◆ 皆さんやっている事は違っても、何かをするという志、熱意が同じで、何かと話はつながるものなんだなと感じた。
◆ 各々同じ課題を抱えていたり、違う課題をもっていたりして、おもしろかった。
◆ 学生と社会人のテーブルだったので、取りくみの工夫と発表を聞いた大人のアドバイスなどフィードバックでき、嬉しく思う。
◆ それぞれの大学の「色」を感じられました。自分の学校にあって他校にないもの、その逆も沢山あって面白かったです。

■学生が自ら学ぶために支援者として必要だと感じたこと（社会人のみ）

学生が自ら動き、学んでいく「きっかけ」をどのように提示をするか？動きだした学生をどのようにサポートするか？をお感じになった方が多かったようです。
そのために、まずはご自身が楽しくあること、ご自身を見つめること、そして信じて待つことなどの大切さなどのコメントも見られました。

コメント抜粋

◆ 笑顔、一緒に楽しむこと。
◆ 学生を中心に学生自身が企画できるよう、後ろからサポートすることが大切だと感じました。主役は学生で。
◆ （悪い意味でなく）自分をみがく。（学生さんが立派にみえてしょうがなかったです）
◆ 学生自身に考えさせるためのきっかけ作り。
◆ 学生と誠実に向き合うこと。
◆ 学生は自ら成長する力を持っていると再認識しました。私達がいかに上手にフォローしてあげられるか。
◆ ここまで成長するためのきっかけづくりをどのようにしたらよいか。
◆ 手や口を出さないこと。（精々）そっと手を添えじっと待つこと。「待っている」と学生は「信じてもらえている」と感じるはずです。これを要するに「信じてじっと待つこと」です。
◆ 活動を客観的、論理的に分析するという面でのサポートができていない（できない）ので、それをどうすればいいかが課題だな、と思いました。

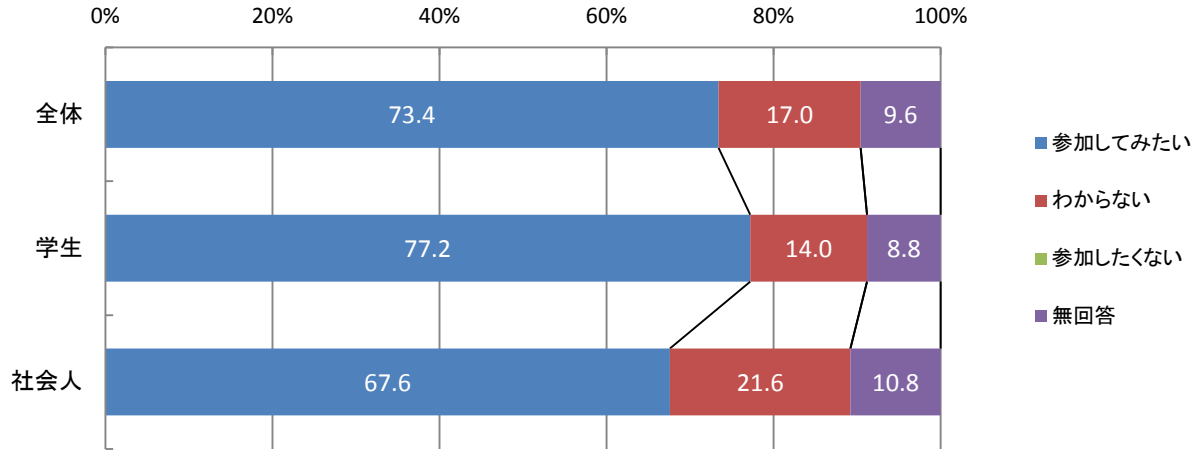
■支援者として難しいと感じていること（社会人のみ）

大学側の組織体制の問題はもちろん、学生との距離の保ち方・課題設定の方法・モチベーションの維持など支援者として学生と向き合おうとしていらっしゃる方々だからこその課題が多くでてきています。

コメント抜粋

◆ やらない、やれない学生をやる気にさせること、そんな意味でこの自己探は大いに参考になります。
◆ 学校全体の体制。
◆ 学生を知って、いい距離間をたもつこと。
◆ 学生の深い所に届くような言葉、態度としてどのような投げかけをすればよいかということ。
◆ 「やる気スイッチ」があるはずなのになかなか見つけられない学生がいること。
◆ 組織の熱量の維持。
◆ 学内の連携。（特に教職員）
◆ 学生へのアドバイスのタイミング。
◆ ハードル、難易度の設定。難しいと学生が離れ、簡単だとルーティン化してしまう。
◆ そのような対話型や参加型の学びを体験していない教員が多く、理解もまだまだであること。
◆ ①「上から目線」のスタンスが学びを妨げているのかも？②「与えてもらう」ことに慣れすぎではないか？

■次回も参加してみたいと思われますか？



■その他自由記述欄

コメント抜粋

学生

◆ 主体的に活動している学生、そしてその活動に関心を持っていて下さる多くの方々が、こうして集まることはとても刺激的で、すてきだと思います！私自身このような場をつくることにも感心がありますので非常に今、新たな挑戦へとワクワクしています。
◆ 他大学と関わることもできることの少ない経験で、行っている活動もそれぞれ違うので面白い。自分の団体が変われた時には、またその場所に来れるようになりたい。
◆ 主体性のある学生が集まっていること、一番強く感じたのは、質疑応答の時間に、手が挙がる学生が溢れるほどいたことでした。学内ではなかなか見られるものではないのでワクワクした気持ちになりました。またぜひ参加したいです。
◆ 今回、見学者として参加をして他大学の団体のプレゼンを聞けることをわくわくしていました。その中で発表を聞いてすごい得るものばかりで、どの団体も魅力的でした。ぜひ、今後の活動、学生生活に生かしていければと思います！とてもいい経験をさせていただきました。ありがとうございました！
◆ １日がとても私たちのためになったと思いました。発表の準備をする中で自分たちの目的などを改めて確認できるいい機会だと思いました。
◆ このような場があると刺激になって自分たちの活動をよりよくしたいと思える上に、新しいアイディアがたくさんあって取り入れたいと思い、次につなげられると思った。また、他大学の方と、つながりができるのが嬉しい。
◆ 今回、学校外で自分たちの活動を伝えるという初めての試みで、たくさんの準備期間を設け、工労しました。しかし、その工労以上に達成感と新しい人との繋がり、発見を知ることの喜びのほうが大きく、是非また参加したいと考えています。今回、こういった貴重な場を設けていただき、本当にありがとうございました。
◆ 農業大とかだと学校の制度自体が違うので、伝えるのが難しいな･･･と思いました。自分の大学が基準になってしまっていますよね。
◆ 学生と大人が一緒になったこのFilですが、とてもおもしろかったです。ありがとうございました。

社会人

◆ 文理を問わず様々な学生の発表、意見交換の場に居合わせられたことを嬉しく思います。ありがとうございました。
◆ 大学生のパワーを感じました。自分の学生も出来るはず･･･。仕掛けたいなと･･･。
◆ おせじではなく勉強になりました。すばらしいイベントでした。うちの大学でもなにかやりたいなと思っているのですがね。これからも頑張りますのでご支援を。
◆ 今日は学生の本音に近い生の言葉を聞けてとてもよかったと思います。
◆ 成果報告をすることで、活動を振り返り、問題点や強みを改めて知ることにつながると思うので、学内でもこのような機会を作っていきたいですね。
◆ タイムマネジメントよりも大切なことがある。いつもLearning Valueさんの研修を通じて感じていることです。今回も楽しみました。会場がフラットなので後ろからのステージの視認性に若干の難があったかもしれません。
◆ 初回と伺いました。ご準備おつかれさまでした。学生も社会人もパワーがある、そのパワーを共有できる場でした。

実施日：2016年2月26日（金）
アンケート回答者数：学生計57名　社会人37名

発表団体紹介

Fil2016応援したい団体第1位　関西大学恋する学問

目標/ミッション

受講生が主人公のアクティブラーニング型の授業を通して、学問の原点が身近な事柄に対する好奇心から始まることを実感してもらい、学問を深めるキッカケづくりをする。

Fil2016応援したい団体第2位　東京国際大学ボランティアサークルWITH

目標/ミッション

東日本大震災の被災地宮城県気仙沼市における、“繋がり”を大切にしながらの支援活動

Fil2016応援したい団体第3位　東京農業大学厚木キャンパスだいこん１万本プロジェクト

目標/ミッション

だいこん1万本アートプロジェクトを通して学校・企業・地域の繋がりを一層強化し、農業を身近に感じてもらう。

常磐大学TSS支援チーム

目標/ミッション

学生・教職員が協働しながら主体的に行う活動“ＴＳＳ活動”を支援することにより、常磐大学・常磐短期大学の活性化、学生相互のサポート体制の形成および学生・教職員の様々な能力の向上に寄与する。

発表団体紹介

東京都市大学ラーニングコモンズ

目標/ミッション

新規開設したラーニングコモンズの運営と学習サポート

北九州市立大学地域共生教育センター（421Lab.）

目標/ミッション

多くの北九州市立大学の学生に貴重な学びを得てもらうために、地域活動の魅力を発信したり、活動しやすい環境を整えること。

川越フロンティア

目標/ミッション

若者の視点から川越の問題を考え、解決方法を探り、新しいまちおこし活動「川越フロンティア」を実践する

梅光学院大学Buchiサポーター

目標/ミッション

入学当初高校までの生活とは違う環境で不安や緊張、不慣れさを感じている新入生たちに、同じことを経験した先輩サポーターが寄り添いながら応援する。

「学びの価値を探求し、豊かな社会を実現する」

この企業理念実現のため、今後も学びの場を創り続けて参ります。

株式会社ラーニングバリュー
代表取締役　安田仁秀

去る2016年2月26日「Field of invaluable learning 2016」を開催いたしました。
ご参加、ご協力頂きました大学関係者、企業関係者のみなさま、誠にありがとうございました。
心より御礼申し上げます。

弊社の企業理念は、『学びの価値を探求し、豊かな社会を実現する。』とおいています。

学びによって、新しく深い気づきが生みだされ、
その気づきは意識や思考に変化をもたらし、行動変容に結びつく。
行動が変わることで周囲からポジティブなフィードバックが届き、自信につながり、周囲の景色が変わる。
そのプロセスが豊かな気持ちを沸き起こすのではないかと考えています。

そのような学びの場をたくさん創造し、提供していくことが我々の使命だと信じています。
Filはまさしくそのような場の提供になったのではと感じております。

参加者の発表を聴いて、
「すごい！今の学生も捨てたものではない。」
「いや、今の学生の方がすごい！」と、心から感動しました。
何度も熱いものがこみ上げてきました。
社会人も多くの刺激を受けたのではないでしょうか。
学生だけではなく、参加した社会人にとっても学びの場となり、さまざまな「学び合い」があの場で生じたのではないかと感じております。

古今和歌集につぎのような句があります。
『世の中に桜の花がなかりせば春の心はのどけからまし』
世の中に桜の花がないとしたら春の季節はもっとのどかな気持ちですごせるのにな、と言いつつ、
桜という素敵な花が世の中存在することを逆説的に心から賛じている句であります。

私は次のように詠みたいと思います。
『世の中に学びの場がなかりせば皆の心はのどけからまし』

ラーニングバリューはこれからもたくさんの学びの場をご提案して参ります。
次回のFil2017もさらに充実させてお届けする所存です。

今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。

編集後記

初めてにも関わらず、たくさんの方々にFilにご参加頂き、本当にありがとうございます。
Filを通じて、学生の方々と教職員の方々からの「熱」を改めて感じました。知ってほしい、知りたい、出会いたい、学びたい、成長したいというみなさまの欲求を感じたのだと思います。当たり前かもしれませんが、誰もがそんな欲求を持っているという事を改めて感じた1日でした。
この冊子を通じて、そんなみなさまの熱をたくさんの方々とまた共有できる事がとても嬉しいです。
この熱がいろんな形で伝播していくような気配も現場の人間として感じています。まだまだ私たちにもお手伝い出来る事はありそうです。

株式会社ラーニングバリュー
Fil事務局　安達　雄一

学生のエネルギーとパワーに圧倒されたFil2016。学生が「学ぶこと」「成長すること」をツールに学び合うことを願って企画したFilではありましたが、その場で起こっていたことは、私たちの想像をはるかに超えたものであったと思います。ご参加いただいたみなさますべてに感謝いたします。
私たち大人にできることは、挑戦したいと思った学生が挑戦できる場を用意してあげること、やるかやらないかで迷う学生には最初はちょっと無理やりにでも「やる」ほうへ背中を押してあげること。あとはじっと信じて待つことなのだろうと改めて確信しました。
私たちが生きたことの無い世界を生きる学生たちに、私たちができることは何なのか、再度しっかりと考えていきたいと思います。

株式会社ラーニングバリュー
Fil事務局　吉田未来子

発行人
安田 仁秀
編集
吉田 未来子・安達 雄一

発行
株式会社ラーニングバリュー
本社
東京都港区浜松町1-25-13浜松町NHビル4F
お問い合わせ
03-5776-5960

※無断転用・転載は禁止とさせていただきます

- 互いの成長を願うこと
- 互いに感じたこと、考えたことをできるだけオープンに話すこと
- それぞれの「違い」を楽しむこと
- 学生も社会人も学び合うこと

Field of invaluable learningで大切にしたいこと